

取組実績の概要（2 ページ以内）

本事業における4年間の取組実績を、テーマVの評価観点である、1. 3つのポリシーに基づく教育活動の実施、2. 卒業段階でどれだけの力を身に付けたのかを客観的に評価する仕組みの構築、3. 学生の学修成果をより目に見える形で社会に提示するための手法の開発、4. 学外の多様な人材との協働による助言・評価の仕組みの構築、の4点から述べる。

1. 3つのポリシーに基づく教育活動の実施

1) ディプロマ・ポリシーに基づく「10+1の能力」

ディプロマポリシーの分類	具体的な能力	評価方法	
【知識・理解】	専門分野に関する知識	GPA	
	人類の文化・社会・自然に関する知識		
【思考・判断】	対課題 論理的思考力		ルーブリックによる 学生の自己評価
	課題探求力		
【技能・表現】	対人 語学・情報に関するリテラシー		
	表現力		
	コミュニケーション力		
【関心・意欲・態度】	対自己 協働実践力	パフォーマンス評価	
	自律力		
	倫理観		
統合・働きかけ	上記の諸能力を内的に統合し、周囲の文化・社会・自然・人間などに外的に働きかけていく能力		

本学では、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びアドミッション・ポリシーについて見直しを行い、平成28年4月に公表した。これにより、本学の学生が修得すべき「10の能力」及びその諸能力を統合し他者に働きかける力「統合・働きかけ」（以下「10+1の能力」という。）に結び付け、それぞれの能力の定義を明確にし、全学で体系的・組織的な教育の整合性を図った。

2) 多面的な評価方法の整備

「10+1の能力」は、GPA、ルーブリック評価、パフォーマンス評価の多面的な評価方法を用いて評価する。8つの能力を評価するルーブリックによる学生の自己評価と、「統合・働きかけ」を評価するパフォーマンス評価を学生による自己評価と教員による他者評価を組み合わせて実施するスキームを構築した。従来のGPAに加え、多面的な評価軸を用いて、卒業段階で学生がどれだけの学修成果を身に付けたのかを客観的に評価するための方法が構築された。

3) 能動的な学修に向けた環境整備とその成果

「10の能力」を育成するため平素の授業で能動的学修、すなわちアクティブ・ラーニングを取り入れるための環境整備の一環として210番教室の整備を行い、あわせて、平成29年度から教員による授業方法調査を実施した。アクティブ・ラーニングを取り入れた授業科目の割合は40%程度で、3年間で大きく変化していないが、各授業に取り入れた活動内容は平成30年度に増加し、令和元年度もほぼ同じであることから、多様な活動を取り入れ、工夫された授業が展開されるようになったことが成果として挙げられる。

また、学生の授業外学修時間が取組開始から増加し、目標値を大きく上回っており、本事業の取組が学生の能動的な学修を促進していることがわかる。

2. 卒業段階でどれだけの力を身に付けたのかを客観的に評価する仕組みの構築

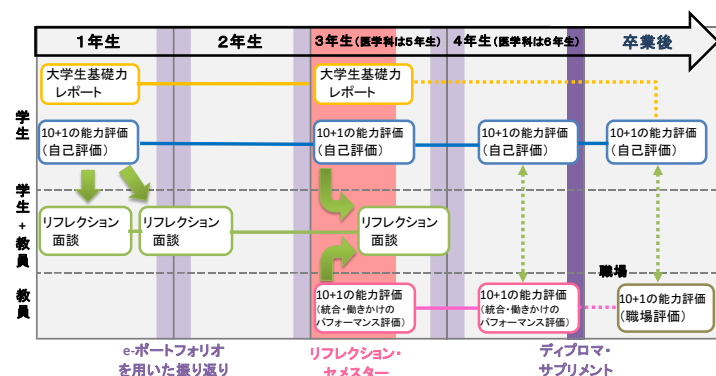
1) 厳格な成績評価に向けた取り組み

厳格な成績評価のために、学生の学修成果を客観的に評価するための基準や方針を定め、全教職員で認識を共有している。各授業科目の成績評価の透明性を担保するために、成績評価分布の開示（平成29年1学期以降）及び「公正な成績評価の実施に向けて（申合せ）」及び「公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されていることを担保するための体制の構築」を定め（平成30年3月）、各授業科目の成績評価基準を明確化し、全教員が共有することにより、厳格な成績評価の取組を実施してきた。さらに、各学部等の内部質保証委員会等で成績評価について協議する体制が整い、組織的な取組が実施できている。その結果、GPAの平均が平成28年度2.25から令和元年度が2.16と下がっており、厳格な成績評価が実施されるようになったことがうかがえる。

2) 「8つの能力」の学生自己評価

学生が身に付けるべき能力を社会との接続の視点から捉え直し、企業や学校関係者等の学外の社会人と協働して、上述の「10+1の能力」のうち、ルーブリックによる学生の自己評価を行う「8つの能力」についてアセスメント項目を開発し、ルーブリックによる評価を平成30年度入学生から実施している。この評価は1年次と3年次に実施され、結果を学修ポートフォリオ（以下、「e-ポートフォリオ」という）に蓄積することで、学生が自らの学修成果を確認し、今後の学修に向けた目標の再確認や再設定を行うことが可能となった。

### 3) 卒業後までを射程に入れた評価スケジュールと実施状況



下図は、本学の4年間及び卒業後までを射程にいれた各評価の体系図である。本学が実施する診断的評価・形成的評価・総括的評価について、学生による自己評価と教員による他者評価、10の能力のうちGPAで評価する2つの能力を除いた8つの能力を評価するセルフ・アセスメントと+1の能力を評価するパフォーマンス評価及び外部テストの実施時期を表している。さらに学生の振り返りとそれを支援する教員による面談時期を表示し、入学から卒業後

までの評価の体系を示した。このスケジュールに基づき、各評価と面談を実施している。

本取組により、全学的な評価の体系化を図ることができ、入学から卒業までの一貫した評価の実施を推進できた。

### 3. 学生の学修成果をより目に見える形で社会に提示する手法の開発

#### e-ポートフォリオの再構築と機能拡充

本事業を契機に、卒業時の学修成果の客観的提示方法として、既存の教務情報システムとe-ポートフォリオを再構築するとともに機能の拡充を行った。また、e-ポートフォリオに蓄積された学修成果をポートフォリオ・サマリーとして表示し、学生のキャリア形成に役立てるとともに、令和元年度からは、卒業時にディプロマ・サプリメントを卒業生に発行できるようになった。

### 4. 学外の多様な人材との協働による助言・評価の仕組みの構築

本事業では、これまで5（4）段階評定で行っていた学生の汎用的能力の自己評価を、ルーブリック評価に切り替える取組を行った。ルーブリックの開発にあたっては、地域・企業関係者ら学外のステークホルダーとの研究会において、評価指標の改善、評価方法やその運用面についての意見を聴取し、ルーブリックに反映させた。また、卒業生の就職先への聞き取り調査において、指標の有効性について聴取するなど、実社会の意見を取り入れた検証・分析を行っている。

#### 【必須指標の達成度】

	平成 28 年度 (起点)	令和元年度	
		目標	実績
学生の成績評価 [GPA 平均]	2.25	2.20	2.16
学生の授業外学修時間 [時間数 (1週間当たり (時間))]	10.7 時間	12.0 時間	15.4 時間
進路決定の割合 [% ((就職決定者数+進学者数) / 卒業者数)]	89.3% (981/1098)	93.0% (1005/1081)	93.8% (1006/1073)
事業計画に参画する教員の割合 [% (参画教員数/在籍教員数)]	74.2% (451/608)	80.0% (486/608)	83.1% (506/609)
質保証に関する FD・SD の参加率 [% (参加教職員数/在籍教職員数)]	60.6% (578/954)	70.0% (611/873)	77.4% (731/945)
卒業生追跡調査の実施率 [% (調査回答者数/卒業者数)]	19.6% (210/1071)	20.0% (222/1110)	33.6% (360/1073)